



新たな学びに触れる探究実習（ストレートマスター編）

2019年が始まりました。2018年は、ノーベル生理学・医学賞に、京都大学の本庶佑特別教授が選ばれました。日本のノーベル賞受賞は2年ぶり26人目だそうです。2019年、佐賀大学教職大学院一同、教授陣に負けなくらい熱い研究をやっていきたいと思っています。

さて、MIは、1年間を通して行ってきた実習の成果をまとめる時期を迎えました。眉間にしわを寄せながら、パソコンとにらめっこしている状態が続いているわけですが、凍えるような寒さの中、徒歩や自転車で学校まで通っている子どもたちを見ていると、「子どもたちも頑張っている分、自分ももっと頑張らなくては!」と心奮い立たされます。

今月号では、ストレートマスターが基盤教育実習を通して、学んだことや感じたことを「小学校」「中学校」「高等学校」の校種別に紹介したいと思います。大学生時代の教育実習とは異なり、探究実習は、半年間に及ぶ長期間の実習となりました。教育実習では、観ること、体験することのできなかった部分を学ぶことができ、充実したものとなっています。



 <p>小学校</p>	<p>元気な子どもたちに囲まれて、楽しく実習を行うことができました。実習では、授業の時間に限らず、学校生活の様々な場面で子どもたちと関わりながら、多面的な児童理解に努めました。また、自身の研究テーマのもとに授業を観察したり、実践したりする中で、理論と実践をつなぐことの難しさを実感したとともに、新しい視点から、授業について考えることができました。実習の中で、うまくいったこと、うまくいかなかったことは多々ありますが、今回の実習を通して経験したことを生かして、来年度の研究につなげていきたいと思っています。</p>
 <p>中学校</p>	<p>私たちは中学校教員を目指しています。基盤教育実習では、2年間の研究を視野に入れつつ、生徒の実態把握と実践的指導力の向上に努めました。実習を通して特に感じたことは、中学校教員には教科の専門性が求められる一方で、生徒との信頼関係の構築が必要不可欠であるということです。多感な時期の生徒の心を、日々の関わりの中でしっかりと受け止めることで、生徒たちが楽しく学べる雰囲気につながっていくのだと思いました。</p> <p>2年次の実習では、今回の実習で学んだ様々なことを糧に、更に理論と実践の往還を実現できるよう、精進します!</p>
 <p>高等学校</p>	<p>下手くその上級者への道のりは己が下手さを知りて一歩目 —スラムダンク、安西先生の言葉より—</p> <p>高校の実習を通して、現場の先生方の日々の努力や生徒に対する熱い思いを感じることができました。また、実際に授業を行うことで、改めて自身の授業実践の課題や未熟さを知ることができました。今はまだ新参者ですが、教師という共同体において、古参者になれるよう、まずは教員採用試験に向けて勉強を頑張りたいと思います。</p>

以上、MI ストレートマスターの実習報告でした!